

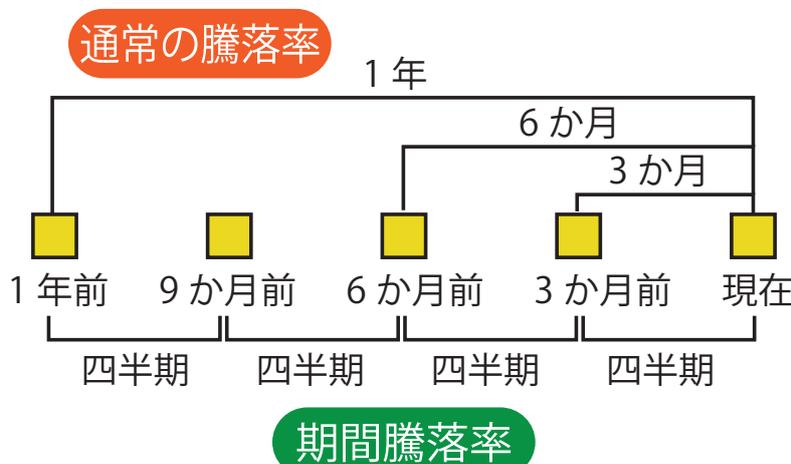
1.2 期間騰落率が必要になる理由

ファンドの基準価額の変動のことを「騰落率（とうらくりつ）」という。私たちが「リターン」と呼んでいるものであるが、運用報告書などには騰落率と記載されている。10,000 円だったファンドの基準価額が 11,000 円になったとすると、「騰落率は 10%」

$$\frac{11,000}{10,000} - 1 = 10\%$$

と計算される。つまり、ファンド（投資信託）に投資して儲かったのか、損したのかを測るものさしとなるものが騰落率ということになる。

図 1.3 期間騰落率



騰落率は重要な情報なので、運用報告書はもちろん、ファンドが独自に提供する月次レポートなどにも記載されている。そして、月次レポート、表示されている騰落率は、通常、「1 か月」、「3 か月」、「6 か月」、「1 年」、「3 年」などとなっている。この表示方法は、「1 年前に投資したのであればどの程度の利回りになっているだろう」という疑問に答えを与えてくれる。

しかし、1 年前に投資して、現在までどのような運用が行われていたのだろうという疑問には答えを提供してくれない。そして、その答えを用意

するためには、期間騰落率というものが必要になる。通常の騰落率と期間騰落率の違いは、図表 1.3 に示すとおりである。この例では、3 か月（四半期）を期間の単位としている。

通常の騰落率の計算では、直近の「3 か月」の部分がすべての期間で重なっているが、期間騰落率は、現在を基点にして四半期ごとの騰落率を計算しているので重複する部分がない。それゆえ、騰落率の計算の起点にかかわらず、ファンドの運用そのものに焦点を当てることが可能になる。